

2006年度海外研修生等助成事業 研修報告

イタリアの高校教育における、 特に意識付けの方法を探る

静岡県立掛川東高等学校 教諭 望月 満子

「最近の高校生は…」と学力低下や意欲減退が指摘されて久しい。一方で、個人的にイタリアで知り合ったイタリア人は、TV等から流れてくるイメージとは違い、皆独立心のある、地道な生活者ばかりであった。以前から欧州の教育制度や教育活動に興味もあり、イタリアの教育方法を学び、教育活動のヒントを得たいと考えた。

研修先は国立の小・中・高一貫教育校Altiero Spinelli(トリノ市)である。EUの統合後、欧州の主要言語を学ぶ必要性から創設され、伝統校のLiceo classicoとは違い、徹底した語学教育を特色としている学校だ。

研修を通してまず確信した事は、生徒には確かな基礎学力が不可欠だ、と言う事である。浅く広くの単なる記憶力の鍛錬ではなく、自分で調べ、自分の言葉でまとめ、それを説明できる能力を養う、という方向での基礎学力である。必然的に磨かれた日本語の能力が前提となる。今回の研修テーマの「意識付け」は生徒自身に「自分の言葉で考える力」を付けさせる事が出発点であったのだ。

印象深い授業を紹介しよう。例えば中学1年では毎日「伊語」の授業があり、特に文法は毎週2時間ある。しかも毎日テキスト2ページ分の宿題があり、それを忘れてたり、答えを間違うと、容赦ない叱責を教師から受けるが、生徒からの文句は一切無い。また、高校の「伊語」ではダンテ「神曲」の授業に文学の深さを垣間見た。そして「歴

史」では、イリアスの詩を実際に読み、語意から内容、作品の由来の推理にまで到った。また、「数学」では折り紙を使って図形の構造を理解する授業を見た。平面で立体図を想像しながら考えるのと違って分りやすく、眼前の図形の問題だけでなく、様々な場面で物事を多角的に見る視点を持てるようになるのだろうとも思った。そしてどの授業でも真理追究という学問への姿勢があることにも圧倒された。

一方、生徒や保護者へのインタビューでは、ある父親の「生きる事はとても難しいが、どんな状況になっても、経済的に安定した、しっかりした職業を持っていれば何があっても大丈夫だ。それが人生で最も重要だ」という言葉と、それをその息子が素直に良く理解しているような生活ぶりであったのが印象的であった。

この研修で見聞した事を広く伝え、私自身も再度勉強し、実のある教育活動に努めたい。



「折り紙」を用いて
線と面を考える生徒たち
(数学の授業)